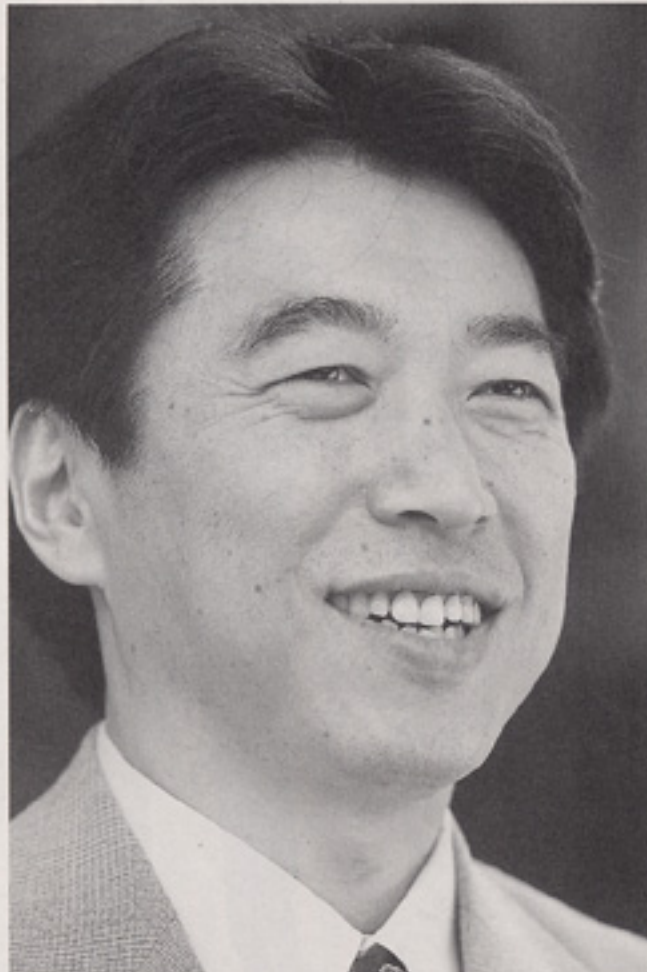


Shin-ya 新聞 vol.1

「足立信也」は
こんな人です。

昭和32年(1957)年6月5日	大分県生まれ 現在46歳
昭和45年(1970)年3月	大分市立上戸次小 卒業
昭和48年(1973)年3月	大分市立戸次中 卒業
昭和51年(1976)年3月	県立大分舞鶴高 卒業
昭和57年(1982)年3月	筑波大学医学専門学群 卒業
平成2年(1990)年1月	医学博士号取得(筑波大学)
平成6年(1994)年7月	筑波大学外科講師
平成10年(1998)年4月	日本腎臓学会評議員
平成15年(2003)年1月	筑波大学外科助教授
平成15年(2003)年4月	国立鹿ヶ浦病院 消化器科医長
平成16年(2004)年4月	筑波メディカルセンター病院 診療部長



自宅から雄大な大野川を眺める。

故郷への
感謝を忘れない。

「亡き父、亡き母への想い。」

私

は大分市上戸次（大分市）の出身です。字

は影の木といいます。雄大な大野川の流れを眼下に眺め、その背景に天面山、祖母・嶺の山々が連なります。

亡き父は「庭先から、縦に流れる川の流れを眺望できる日本人はそういない」と自慢しておりました。その庭先には亡父が遺骨も遺品も戻らない実兄とその部下のために建立した観音様が立っております。床の間には祖国のために一身を捧げるのは男子の本懐、故郷の豊水・連山を望みつつ明鏡止水と書した伯父の戦地沖繩に旅立つ朝の26歳の書が掲げられています。私はそういう中で育ちました。

私は大分を愛しています。大分を離れても、毎年二回以上帰省しています。帰れば必ず飲み会を開いてくれる心優しい友がいます。この故郷の山や川、そして友達はその心の支えでした。私は医学の道へ進みましたが、研鑽を積み、妻も大分の同級生であることから、いつか第一線で働けるうちに故郷へ帰りたいと思いつけていました。

ただ、これまで、「今の自分では不十分だ」という思いが私を遠い筑波山のふもとにとどめました。

幼い頃から、父や母、兄の存在は、私にとってかけがえのないものでした。両親を亡くした今、私を育てていただいた「大分の皆さんへ恩返ししたい、そして、国民の皆さんが安心できる日本にしたい」と意を強くしています。



足立信也の生い立ち

十 年前に父を、九年前に母を相次いで亡くしました。そのため、この「生い立ち」を記すにあたって、自らの幼い頃の記憶を確認する手立てがありませんでした。ところが、立候補の決意を固めるにあたり、戸次の地縁者や小学校・中学校の恩師・旧友など、多くの方々にお会いしたところ、懐かしい話をたくさん伺うことが出来ました。

みなさんが、実によく私のことを覚えていてくれたことは、嬉しい驚きでした。面映いばかりの、お褒めの言葉を送ることも少しはありました。みなさん方からいただいた記憶と古いアルバムを手がかりに筆を起しました。多少、自慢話めく所がありますが、お許しいただければ幸いです。

上戸次の洩垂れ小僧。

1 957年(昭和32年)6月5日、父・二世(ツギヤ)、母・ウメノ(旧姓後藤、大分市竹中上冬田出身)の次男として出生しました。

誰しも、時代の影響を受けずに成長することはできません。戦後日本の最大のイベントであった東京オリンピックは、私が7歳のときでした。オリンピックを境にして、日本は急速に都市化への歩みを速めたといわれています。私は、辛うじて、また貧しかった農村の風景をとどめる戸次を、原体験として持ちうる最後の世代に属していると思います。

私が、物心ついて最初に覚えているのはケネディ大統領の暗殺事件です。その頃、夢中になってみていた「ひょっこりひょうたん島」や「鉄腕アトム」

より前に「ケネディ大統領の暗殺事件」が記憶されています。今にして思えば、多くの日本人がそうだったように、上戸次の洩垂れ小僧も、テレビというメディアを通じて、初めて、「世界」を感じた瞬間だったのかもしれない。

六歳の頃には、近所の農協職員の方に連れられて、大分市中戸次の「みのり保育園(真宗大谷派、妙正寺)」へバスで通っていました。その方とは、先日再会し、40年ぶりにお礼を言うことが出来ました。母がたまたま、保育園を覗きに来たときのことです。年少の女の子が高い木の枝に風を引く掛け泣いているのをみかねた私が、木に登って風を取ってあげたそうです。ずっと前に、母から聞いた昔話を思い出しました。

東京オリンピックに夢中、スポーツ万能な小学生。

1 964年(昭和39年)上戸次小学校へ入学。一年年の人数は20人でした。東京オリンピックをテレビにかじり付いてみていました。特に、陸上、マラソン、男子体操、重量挙げ、レスリング、女子バレー、柔道に感動したことを憶えています。個人名ではポプヘイズ、アベベ、円谷、小野喬、遠藤幸雄、早田(吊り輪)、山下とび、三宅義信、渡辺のタツクル、猪熊、ヘーシンク……感動のあまり、東京オリンピックの作文を投稿したことがあります。しか

し、敢え無く、没。作文を見てもらった担任の先生からは、あまりに詳細で正確で長文であり、小学一年生の作文ではない」と判断されたのだらうと思われしました。



上戸次小運動会で家族と。左から2人日

この頃は、男の子の人数が少なかったため、遊ぶときはほとんど小学生、中学生まで地区のほぼ全員と一緒に遊んでいました。みんなで遊ぶときは、何ととっても野球でした。そして、夏は、大野川と吉野川での水泳水遊びです。台風の日日に散策するのが好きで、水かさの増した川で泳ぐのも好きでした。タイヤチューブを浮き輪にした急流下りも、忘れることが出来ません。2年生のとき、河原で遊んでいて、頭に大怪我をし、今でも傷跡があります。頭だけに、両親はかなり心配したようです。

4年生からは毎年、大南地区陸上記録会へ参加しました。6年生では、百メートル走、走り幅跳び、ソフトボー

ル投げに入賞。走り高跳びは優勝(1メートル25センチ)、リレーは二位という成績でした。

また、健康優良児の大分市選考会へ出たこともあり。その時、津留小学校から来ていた男の子と知り合いになりました。彼とは、その後、舞鶴高校の寮で同室となり、今でも親交が続いています。

「全部にがんばりよる姿にみんなは着いていきよんのぞ」

1 970年(昭和45年)戸次中学に入学。三年間、5キロの道のりを自転車通学しました。一年生のとき、

大分市の陸上大会の選手選考をかねた校内記録会で、走り高跳び1メートル52センチ、県のタイ記録(中一)、走り高跳び4メートル72センチ、校内新記録(中一)、勉強の成績はトップで、俄然注目されました。

当時の戸次中学校は、上戸次小学校から13名、戸次小学校からは90名近くと、上戸次出身者は肩身の狭い思いをしていました。しかし、「信也さんのお陰で、この後、10年近くは上戸次の存在感が高かった」と多くの後輩が証言してくれました。

父親は旧制大分中学のサッカー部主将であったことから、私がサッカー部に入ることを望んでいました。しかし、私は、当時最も人気の高かった野球部を選びました。部員数の多い野球

部では、1年生の時は、球拾いばかりさせられていました。



大分県中体連、優勝旗を授けられる足立。

2年生になり、レギュラーを獲得しましたが、春、体育の授業中に腰を痛め、二ヶ月間運動ができず、一学期の陸上大会、野球の大会をすべて欠場という悔しい思いをしました。

夏以降運動を再開し、秋の新人戦は1番サードと控えピッチャーでした。県大会準決勝では国見中学に敗退。その試合で、ピッチャーをしていてサヨナラヒットを打たれました。この悔しさ「みんなに迷惑をかけた」との思いから三年の前期は野球に集中しよう」と決意しました。2年生の後期、私は、生徒会長でもありました。野球に専念していなかったという思いがあったのです。

ところが、3年生になり、生徒会長選挙が近づいた頃、「生徒会長はお前しかおらんやねえか。野球にも、生徒会にも、勉強にも、全部にがんばりよる姿に、みんなは着いていきよんのぞ」と親友たちから立候補するよう詰め

寄せられました。私は、みんなの意気に感じ、期待の大きさに感謝しました。結局、私はみんなの前で、あらゆることに全力でぶつかると宣言する羽目になったのです。

生徒会長として、私は、入学式で歓迎の挨拶をしました。この時の私の話を聞いた父兄の中には、いまだに誉めてくれる人もいます。多分、私に詰めてくれた親友たちの魂が、私のスピーチに宿ったのかもしれない。

この年の戸次中学の活気は大変なものでした。野球部は大分市で優勝、そして中学県体でも、優勝。私は、決勝戦で監督から「疲れの見えるエースに代わって投げろ」といわれました。しかし、私は、これまで一人で投げ抜いてきたエースの頑張りを見て、「彼が投げて仮に負けてもみんな納得する、僕が打って点を取るから」と辞退しました。めずらしいことに三塁手である私が、市も県の決勝戦もウィニングボールを捕球しました。

優勝してバスで帰った後は、戸次の街中をバレードしました。普段、苦虫を噛み潰したような顔の校長先生が行き交う人々に、ニコニコ顔を下げているのが印象的でした。祝勝会ではジュースを飲みすぎて後から出されたスイカが食べられなかったことも懐かしい思い出です。

また、市の陸上大会では、リレー初優勝(私は第一走者)。男子総合で3位という好成績でした。

野球が終わった後、同級生たちと海水浴に行き、「受験生の自覚がない」と全員の前で殴られたこと……秋の遠足道端にある柿が甘いのか渋いのか議論になり、一個失敗してガブリとからだら洗桶。先生からは「よく食べた」と褒められたこと……週末は20人くらいでよくサッカーをしていたこと……卒業式、涙でうまく答辞を読めなかったこと……すばらしい学友たちに囲まれて過ごした中学時代の思い出です。

これらのことはすべて、この時代、この戸次でなければできなかったことだという思いを強く感じています。その母校へ先日あいさつに行ったところ、校長室に県中体連の優勝旗がありました。昨年後輩たちの頑張りがありました。私たちが優勝して以来、31年の時を越えて戸次中学に戻ってきていました。私は運命的なものを感じ、後輩たちの活躍に心から拍手を贈りました。



2002FIFAワールドカップ「メキシコvsエクアドル」を観戦、大分トリニータの熱烈なサポーターで「ペンタクラブ」のプレミアム会員。

お前の力が必要だ 国会の場で働かないか

昭 和51年3月、高校を卒業し、受験のために上京しました。

以来、私は一人前の臨床医を目指して研鑽を積んでまいりました。医師となつてからは週五日程度の泊り込みの生活が四年間続き、さらに三年間ほどは週二、三日の泊りが続きました。その後、医学の真理を追究したい、優れた臨床医を作りたいという思いから、卒業十三年目に母校の筑波大学の教官になり、またたく間に十年が経過しました。

ところで、三年ほど前から私たち首都圏の同級生は東京で同級会を年に二回開催しています。当然、同級会としては個人の近況報告が話題の中心です。それぞれが自分の分野で精一杯頑張っている、みんな輝いていると私は感じていました。



そんな中で、「日本国民の多くが抱えている閉塞感、得体の知れない将来

への不安感を取り除こうではないか」という考えが浮かんできました。その霊源は吉良州司氏であり、彼は既得権益を守ろうとする「官僚政治から国民の手へ政治を取り戻したい」と主張するのです。殻を破った彼の純粋で情熱的な行動に私は感銘を受けました。

わ

が身に振り返ったとき、私は臨床医として目の前にいる患者さんから受ける印象と医療従事者としての同僚たちの持つ雰囲気という範囲の社会観から感じることは、私を含めた若い世代にどうも元気がないと思えないのです。

患者さんは今話題の年金はともかく、医療に対する不安感、将来自分もともに医療を受ける機会を与えられるのだろうか、貯蓄をしていなければ医療さえも受けられないのではないだろうか、さらに受ける医療は安心できる、信頼されるものだろうかかと不安でいっぱいなのです。

医療従事者側としては、毎日毎日責任を問われる仕事をしている我々のストレスやリスクを伴った医療行為は正當に評価されているのだろうか、精一杯尽くしている我々から元気を奪うような医療制度は正しいといえるのだろうか。私は自分の健康に留意し、自らの元気を患者さんに分け与えられるように接し、そのことが患者さんの自ら癒える力の源になると指導してきました。

大学医学部の教官という仕事は、自分あるいは自分の部下の診療行為の全責任を負い、学生・研修医・若手医師・看護師・検査技師の教育を行い、そして、SOSと評価される研究を行わなければならないません。外科医の診療行為は常にその時点での最良策を選択する決断の連続で、自分の下した決定は正しかったのか、夜中に、はつと目が覚め、眠れなくなることもあります。外科医の仕事が患者の生命へのかかわりが近いゆえのストレスであり、この外科医の苦しみはなかなか評価されません。

吉

良州司氏はまさにこの時に「元気が大分を創る会」を立ち上げ、元気な大分から元気な日本を蘇らせようと活動を始めました。私は医療・福祉の面から国民の元気を取り戻したいと彼に伝えました。吉良州司氏の「国民に元気を」という政治信条は高齢社会の日本において私の天職である医療でこそ必要とされる理念であると思うからです。

長年医療に携わってきて、医療や福祉に改革が必要と考えている折に彼から医療・年金を中心とした社会保障制度の充実が求められているこの時代に、「お前の力が必要だ、熱い思いを持ったエキスパートとして国会の場で働かないか」という強い要請を受けました。

医師一人の力としては、医療現場と

いう枠の中で根本的な問題を抱えたまま、個人として最善の努力をするしかありません。私は医療従事者としての経験を生かし、政治家として国民の皆さんのための改革に挑戦する決意を固めました。両親や兄の存在があつて私は自分の判断のままに生きる道を決めることができました。特に教育者であつた亡母の「この道に燃えつくしてぞ悔一輪母はウメノといひます」という最後の言葉は一意専心の大切さを説いたものと思いますが、その母が、「あなたが必要とされているなら、やりなさい」と言っている気がします。社会保障制度が問われている時代だからこそ、国民の皆さんが安心して生きていける社会システムを築きたいと思えます。

足立信也と安心な日本を創る会

〒870-0039 大分市春日12-30
TEL.097-573-3355 FAX.097-573-3358
Eメール: info@adachishinya.com
http://www.adachishinya.com

民主党大分県参議院選挙区 第1総支部
〒870-0039 大分市春日5-26
TEL.097-538-3833 FAX.097-538-3816
http://www.dpj.or.jp